小論文　問題用紙（No. 1／2）

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

貧困の境界を生存費用から考えようとするのは、誰もが賛成しそうな考え方である。今でも結構そういった考えはある。しかし、よく考えてみると、人間は生物学的な存在であると同時に、社会の中で社会のメンバーとして生きている。社会の中で生きていないような人間は現実には存在しない。だからカロリー計算だけで判断するような最低生活費は、頭の中だけで抽象的にこしらえた人間生活にしか当てはまらない。むしろ、社会の一員として生きていくための最低限の生活費が貧困の境界となる、という考え方がそこから生まれてくる。

この考えを推し進めたのが、ラウントリー批判の急先鋒であったイギリスの貧困学者ピーター・タウンゼントである。彼は、人間の生活というものは、肉体の維持によるだけでなく、社会における生活様式や慣習によっても支えられていると考えた。彼は次のように述べている。

「茶は、栄養的には無価値であるが、国によっては、経済学者たちによってすら、〝生活必需品〟として一般的に受け入れられている。このような国の多くの人々にとって茶を飲むことは、一生を通じての習慣であり、心理的には必要欠くべからざるものである。そして友達や近所の人々が訪問した時、一杯の茶を供されるのを当然としている事実から見て、茶は社会的にも必要であることが分かる」

つまり、生活にとっての必要というのは、心理的社会的にも必要とされるものなのである。人々は「その社会で慣習になっている、あるいは少なくとも広く奨励または是認されている種類の食事をとったり、社会的諸活動に参加したり、あるいは生活の必要条件や快適さを保つために必要な生活資源を」持たなければ暮らしていけない。

こうした観点からタウンゼントは、貧困とはそれらの習慣や様式を保つために必要な生活資源を欠いている状態だと定義した。ここで生活資源というのは、暮らしていくための食料やその他の必要なもの、諸サービスを購入する収入や資産、社会保障給付などを意味している。

そこでタウンゼントは、具体的な貧困の境界を測るモノサシとして、標準的な生活様式からの脱落、すなわち社会的剥奪（social deprivation）という概念を用いることにした。剥奪（deprivation）というのは、社会で標準になっているような生活習慣の下で暮らしていくことが奪われている、というような意味合いである。これには食事の内容、衣類、耐久消費財の保有や友人たちとのつきあい、社会活動への参加など、さまざまな社会生活における剥奪が含まれる。

タウンゼントは、具体的な剥奪の指標として、たとえば「過去4週間のうち親戚や友人を招かなかったもの」とか「子どもの誕生日パーティをしなかったもの」「1週間の半分以上、調理をした朝食を食べなかったもの」などを、「冷蔵庫がない」等とともに挙げている。

実は、この剥奪の指標を確定するためには、何が社会の生活様式として広く人々の間で共有されているかを調べなければならない。また、収入など生活資源が少ないためにある事柄が「できなかった」のか、その人の考えで「しなかった」のかを識別しないと、貧困か否か決められない、という批判もあった。たとえば「1週間のうち一日も肉を食べなかった」のが、貧困だからなのか、ベジタリアンだからなのかが分からない、という具合である。

こうした批判をふまえ、収入が少ないため「できなかった」事柄のみについて大規模な調査を行った結果、収入（生活資源）が減っていくと、剥奪されている指標数が急速に多くなる収入水準のある一点を貧困の境界とする方法を提唱し、それは「科学的」であると主張したのである。

ラウントリーの生存費用は「絶対的貧困」と呼ばれるが、生活様式からの剥奪指標で判断するタウンゼントの貧困は「相対的貧困」と呼ばれている。生存できるか否かは人間にとって絶対的であるのに対して、後者は、社会の生活様式との相対的な関係の中にその境界を求めたからであろう。

ただし相対的といってもタウンゼントは、剥奪が急に多くなる収入水準のある一点を貧困の境界としているの

小論文　問題用紙（No. 2／2）

だから、その境界としての収入水準は動かせない。その意味で絶対的である。格差や不平等のような意味で相対的なわけではない。

いずれにせよ、タウンゼントのような、変化する生活様式を踏まえた相対的貧困の立場に立つと、豊かな社会でも貧困が「再発見」される可能性が高くなる。先の例で言うなら、アメリカのホームレスが途上国の普通の人より多くのモノを持っていても、アメリカ社会で貧困であることに変わりはない、という説明ができることになる。

生存費用という一見わかりやすい貧困の境界は、社会的存在としての現実の人間という観点からすると実は抽象的なものにすぎないことを示した点で、相対的貧困の考え方は大きな意味を持っていた。今日の先進諸国の貧困の境界は、社会のメンバーとして生きていくのに必要な費用にその基準が置かれるべきだとする点で、ほぼ一致している。途上国の貧困でさえ、社会からの分断を問題にするようになっている。アフリカの「本当の貧困」は、水や食料の不足だけではなく、学校へ行けないとか情報から切り離されているといったことも含んでいる。

（中　略）

しかし、だからといって、社会的剥奪を使った相対的貧困の境界がどこの国でも合意されている、というわけではない。タウンゼントのやり方については、社会的剥奪項目の選び方が恣意的であるとか、大規模な生活様式調査を不可避とするので実用的ではないなどの批判がある。貧困の境界設定をめぐっては、いまも論争が行われているのである。

ポーランドの歴史家で政治家でもあったゲメレクは、どんな貧困の境界も完全なものにはなりえず、結局は「社会が判断する」ものにすぎないと述べている。ラウントリーやタウンゼントの強調した「科学性」や「客観性」は、たしかに生存、あるいは社会的生存についてのある指針を与えてくれる。が、「科学」や「客観」の中に忍び込んでいる恣意的な部分、たとえばラウントリーの食費以外の必需品の選定やタウンゼントの社会的剥奪項目の選び方に影響を与えるのは、この「社会の判断」なのだと言えよう。

誤解を恐れずに言えば、他者に対する配慮や公正さについての異議申し立てがたえずなされるような、あるいは社会を構成するメンバーの連帯や社会統合に焦点が当てられるような社会では、「あってはならない状態」の範囲が広くなり、そうでない社会では逆に縮んでいくのではないか。それは、貧困問題を社会の責務として進んで引き受けようとする社会の成熟度による違い、と言うこともできる。繰り返し述べるように、そのような「あってはならない」とされる貧困の大きさは、社会それ自体の経済的な豊かさとは関係がない。むしろ貧困を「再発見」していく「目」や「声」の大きさとかかわっている。

最近の試みとして、イギリスの社会政策学者ブラッドショーらは、「質素であるが、適切な基準（modest but adequate）」という興味深い表現で、貧困ラインを設定することを提唱している。それは一方で、普通の人々と同じ生活様式を保つだけの生活財やサービスを確保できなければならないが、他方で、それらの生活財やサービスを最もローコストで入手するということを前提に最低生活費を算定するというものである。つまり、タウンゼントの考えとラウントリーの考えを合体させた、社会的生存費用とでもいえる考え方である。

出典：岩田正美『現代の貧困』筑摩書房（ちくま新書）、二〇〇七年、四〇頁～四六頁

問一　本文から読み取れる「絶対的貧困」と「相対的貧困」の差異について、二〇〇字以内で説明しなさい。

問二　『「あってはならない」とされる貧困の大きさは、社会それ自体の経済的な豊かさとは関係がない。むしろ貧困を『再発見』していく『目』や『声』の大きさとかかわっている」とする筆者の見解に、八〇〇字以内で自由に考察を加えなさい。